

## 一般部門 佳作

### 拜啓 水上勉様

石津 義雄

水上勉生誕百周年を祝うこの夏、令和元年八月十五日、第七十四回終戦記念日は日本武道館で式典が開催されました。この日、大型台風十号が西日本に襲来し、山陽新幹線や航空機など交通機関が計画運休、高校野球も順延となりました。わが家近辺への台風の影響は思ったよりも少なく、好きな読書に時間を費やすことができました。

私は福岡に生まれ育った者として、先生が残された多数の作品の中で九州に関わりがあるものを何冊か読みました。例えば、『鶴の来る町』養蜂業と国鉄労組の話、『海の牙』水俣湾沿岸で発生した水俣病を題材にした推理小説、『死の流域』筑豊炭田の落盤水没を題材にした推理小説など、馴染みの場所や地域にことのほか興味があつたからです。

私が選んだ本は『木綿恋い記』（昭和四十年五月）、文春文庫より刊行されたものです。

大分の由布岳に関するものかなあと、何となく思いました。昔は木綿山を「ゆふざん」と言っていたと書いてあつたのです。

『木綿恋い記』の主人公は「柿本由布」。

軍医あがりの男性・草本大吾。その他、由布の人生に関わる人たちが多数登場します。

あらすじは、湯布院町塚原で生まれ育った由布は、父と兄を失いながらも、母と二人貧しいなりに幸せだった。しかし、戦争は由布がひそかに慕っていた青年を奪い、敗戦後の疾風怒濤は彼女を思うさま翻弄し、運命の不思議と残酷さの中に投げ込む…。草本大吾との出逢いがその後の由布の人生を支え、一生懸命に強く生き抜く一女性の一生が美しく描かれています。

読み終えて、何度か歩いたこともあつたにも拘わらず、漠然としが知らなかつ

たあの美しい由布岳周辺が、朝鮮戦争の前線基地であつたことを知り、戦前・戦後を通じて大変な場所であつたことを痛切に感じさせられました。

それにも増して印象に残つた部分は由布の真の強さです。あの時代に、別府や湯平温泉で働きなれた由布が、一大決心をして期待と不安を胸に、東京に出て行く列車の窓から由布岳を眺める場面。その時の心境を考えると、なんとも表現しがたい複雑な気持ちになってしまいます。また、日本を占領したアメリカ兵が日出生台へ侵入し道作り、飛行場、滑走路、ライフル射撃場、モータープール、戦車訓練場、給水施設などを作つたこと、その他に気になる言葉として、進駐軍、飢餓、貧困、連合軍、MP、慰安婦、パンパン、オンリー、売春婦、売春防止法など、今では死語に近い文言で当時の状況を生々しく表現されていることです。

朝鮮戦争が始まつた昭和二十五年には、由布高原・日出生台訓練場にアメリカ兵や南朝鮮義勇軍兵士ら二万人を超える兵隊がひしめき合つていたということなども記されておりました。朝鮮半島での戦いで犠牲者が数百万人も出たという事実も知りました。終戦記念日にこの本を読んだので、齢八十二になつた戦前生まれの私には特に印象深く頭の中によみがえつてきました。

今、身近に世界情勢の報道は、北朝鮮のミサイルの脅威や米中の貿易摩擦、日韓の歴史や経済問題が浮上していますが、一般市民がどうすることもできません。それでも、争いごと、特に戦争は決して起こしてはならないと、一人ひとりが新たに強く願うことが大切だと思ひました。

水上先生は、このご本に第二次世界大戦前後の状況をつぶさに記され、私たちに「決して二度と戦争を起こしてはならない」という大切なメッセージを寄せられたのだと、私は思ひました。

令和元年八月十五日

敬具